
ひたすらに進め

うみぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひたすらに進め

【コード】

N1684W

【作者名】

うみぞう

【あらすじ】

ある夏、ある日、思ったこと。

夏が来るたびに私は気鬱になる。友人と会う気力も食欲も低下し、生産的な行動とは縁遠くなってしまう。

観測史上最高に暑い夏を記録したと言われる、今年、2010年の夏。買い物に行った帰り道、いつもの細道。そこで出会った生き物に、私は大袈裟ではなく、生命の強さを貰った。

陽炎でも見えるかと思う暑さの中、ふと視界の端に何か動くものが映り込んだ気がして、私は気怠さを押しやり、視線を向けた。砂利が敷き詰められた駐車場、数台の自動車。その一台の後ろで、それは動いていた。視力の良くない私が目をこらして見ると、小柄な猫の姿。自動車で出来た日陰の中、細い手足を持ち上げて、ただ一心に毛繕いをしている。猫と私の間は数十メートルは離れていて、こちらに気が付く様子はなかった。白地に、黒と茶の丸い模様が付いているのが見えた。

私は、思わず微笑んでいた。私とその猫を見ながら思ったことは、こんなに暑いのにせつせと毛繕いをして偉いな、だった。それはほとんど考えるという行為を私に自覚させる間もなく、ごく自然に心に浮かび上がった思いだった。

手に持っていた買い物袋の重さが私を我に返らせ、同時に、照りつける太陽光の強さを思い出させた。去り際、改めてその猫を見た。猫は先程同様、ただただ懸命に毛繕いをしていた。

白地に、黒と茶の丸い模様を持つ猫を、以降、私は良く見掛けるようになる。一方的に親近感を覚え、その飄々と歩く姿を目で追う。そして、あの夏の日に見た、懸命さを思い出す。

私は、懸命さを忘れ、動けずにいた。その私の背を押ししてくれた。あの猫はきつと、自分に出来ることをしていただけ。けれど、そのひたむきさが私を助けた。ありがとう。

(後書き)

ある公募に応募し、選外となった作品です。

夏は苦手ですが、物語や映画の中で描かれる、その季節は好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1684w/>

ひたすらに進め

2011年10月9日14時43分発行